

飛翔な日々

〜飛翔編集員のぼやき〜

「手書き文字フェチ」

私は人の手で書かれた文字を見るのが好きだ。たとえばミュージックビデオの中で歌手が自らの手でペンを持って歌詞を書くシーンが出てくればわざわざ一時停止してその人がどのような字を書くのかと見てしまうし、病院で医者がカルテを書く様子も不審に思わない程度にまじまじと見てしまう。

人が書く文字は不思議と書く人の人柄を体现しているような気がするのだ。今まで私が出会ってきた人たちのことを考えてみると、おっとりとした友人が書く文字が与える印象は柔らかく、几帳面な友人が書く文字は丁寧で、豪快な性格の友人が書く文字は堂々としたものだった。これらはあくまで人生経験が浅く人間関係も浅薄なものという一個人の主観的なイメージでしかないので根拠と言えるものは何もない。しかし、新たに人と出会ってその人の筆跡を目にする機会があると「この人こんな字を書きそうだな、わかるな」と納得してしまう。

少し前の話になるが、日本で活動するアメリカ人の芸人が日本の手書き履歴書の文化は効率が悪いと発言したことが話題になった。確かに、大量の履歴書をチェックしなければならぬ企業の立場で

考えてみれば字が雑で読みにくいものも多く混じっているであろう手書きの履歴書に一枚一枚向き合う苦労は容易に想像できる。アメリカでは文字が綺麗であることを美德とするような文化があまりないこと、また合理的であるという理由からパソコン入力した履歴書を使用する方が一般的なのだそう。日本でも徐々にそうなっていくのかもしれない。

この履歴書という例を取ってみてもわかるように、恐らく今後ますます手書きというものは淘汰されていくのだろう。自分の身近なところで考えてみても小・中学生の頃は友人と手紙を渡し合ったり交換日記をしたりして友人の手書き文字を目にする機会は多々あったが、高校生、大学生と年齢を重ねていくとともに友人とのコミュニケーション手段は「LINE」などのメッセージサービスやメールに移行していき、そのような機会は激減してしまった。私のような人間はそのことに少し寂しさを感じる。だからというわけではないのだが、私は離れた地に住む友人と小学生の時から今までずっと文通を続けている。彼女が書く文字は小学生の時以来あまり変化が見られないが、あの頃と変わらない彼女の様子を思い起こさせてくれるようで温かみを感じる。だから私は手書き文字が好きなのだと思う。

一介の「手書き文字フェチ」としてはどれだけデジタル化が進んでも手書きかパソコン入力か選択肢が与えられている場面ではできる限り手書きを選んでいきたいと思うし、またこれからもたくさん人の手書き文字に出会うことができたらいいなあとも思うのである。

(27生 吉川 瑠美)

「パーリーピーポー」

非常に馬鹿げた言葉である。意味を知らない人のために、この言葉の意味を説明するが、パーリーが好きなピーポーという意味である。この言葉を聞いたときに、どのような風貌、人相の人を想像するだろう。多くの人はサングラス、ダブダブの衣類をまとい、アクセサリーをジャラつかせ、ドクロと三代目「Soul Brothers」が好きな、片方の前歯が金歯であるような人を想像したと思う。そのような想像を湧かせるパーリーピーポーという非常にファンキーモンキーな言葉がなぜか、ごく一部の人々からだけであるが私の蔑称となっている。決して自分の風貌を匡正しているわけではないが前歯は全部真正銘の白歯である。服装もこの言葉が抱かせる想像のような服は着たことがない。しかし一部の過激派からはパーリーピーポーパーリーピーポーと揶揄されている。なぜそのような言葉で呼ばれるかを自分なりに推察したところ、人と遊ぶことが多いのからだろうか。なぜ他人に遊ぶ回数まで制限されなければならないのか。てかみんなも見えていないところで遊ぶでくね？ Word に間違ってますよの赤い線が出るような歪んだ日本語で反論したことをご容赦願いたい。これが1パーリーピーポーとしての反論である。これまで長々とパーリーピーポーについて論じてきたが最後にこれだけは言いたい。この揶揄のされ方、嫌いじゃない。

(27生 中村 励)

「おじいちゃんガム」

私はいつもある「ガム」を携帯している。授業終わり・食後・勉強中・暇な時はガムを取り出し、食べている。最近ガムを食べている状態が普通になってしまっている。私とよく一緒にいる人は、靴からガムを取り出す仕草を何度も目撃したことがあるだろう。今回は、私の相棒おじいちゃんガムについて話していこう。

そのガムは、爽やかなミントの香りを放ち、お口の中を爽やかにしてくれる。緑のパッケージが特徴的で、見た目も愛くるしい奴だ。読者の中に見たことある人がいるのではないだろうか。初摘みミントを使っているから、普通のガムとは違った爽快感を与えてくれる。私はすっかりおじいちゃんガムの虜になってしまっているのだ。では、なぜ「おじいちゃんガム」と呼ぶのか、その本題に入ろう。

ある日、私がいつものようにガムを取り出すと、友達が言った。
「それおじいちゃんが食べる奴だ〜」

おじいちゃんガム誕生の瞬間である。理由はこれだけだ。おじいちゃんガムという名前から軽視されがちではあったが、最近では中毒者が出るほどの人気ぶりだ。何かあるたびに私にガムを迫ってくる者もいて大変である。読者の中にもおじいちゃんガムが欲しくなった人がいたら、遠慮なく連絡してほしい。

しかし、すぐにその刺激の虜になるであろう。引き返すなら今だ。やめられないループに嵌って人生を台無しにする前によく考えてほしい。愛する家族・友達の顔を思い出してほしい。地獄で反省してからでは遅いのだ。私はこれからも強く訴えていきたい。

おじいちゃんガムの益々の発展を祈って、飛翔の日々とする。

(27生 堀田 悠輔)

「静岡放浪につけて」

先日知り合いに輸送されて、はるばる静岡へ行くことがあった。初めて降り立った静岡は、自分が思っていたものと大きく違うところが多く、とても新鮮だった。

まず、日の光が暖かい。気温が高いとか、体感温度が高いとか、そういった抽象的な話ではなく、そもそも感じる日差しがとても暖かい。私が静岡を訪れたのは二月の末のことであるが、静岡ICでぼんやり突っ立っていた間とても暖かく、マフラーが鬱陶しく感じられるほどであった。北から吹く風が中部地方の山々にぶつかり、そこで雪を落とすためである。普段暮らす広島や実家の奈良はとても寒く、静岡はそこからさらに北にあるためものすごく寒いのだろうと考えていたので、予想とは違っていて驚いた。行ってみてはじめて得られる気づき、これも旅の醍醐味であるだろう。でも今回は旅じゃなくてあくまでただドナドナされただけである。

二つ目は、私がドナドナされた町三島市についてだ。三島市は、伊豆半島の中心に位置する都市で、人口はおよそ10万人である。東海道新幹線や、『伊豆箱根鉄道』といった私鉄も通っている。東名高速道路の沼津ICからも近く、非常にアクセスのよい町となっている。私はこの三島市に二日間滞在した。私が三島市に着いて、まず。と

ても賑やかな町であるという印象を受けた。というのも、駅前の通りにとても飲食店、正確に言うと飲み屋やガールズバーが多いのだ。どこの通りに行っても飲み屋がある。最近では景気の影響もあり駅前が殆どシャッター街と化してしまった町が多く存在する中、このような賑わいを見せる三島の街は、自分にとってショックと言えるほどの衝撃だった。三島を中心に活動していたひとによると、三島は交通の便がよく、様々な方角から人が行き来できる土地なので、このように飲食店が多く存在するらしい。なるほど西条とは違うわけだ。蛇足だが、静岡県は熱海市や伊東市などの高度経済成長期に発達した温泉街も多く、これらの地域も飲食街が多いように感じた。しかし、集客数の低下により、昔ほどの賑わいはあまりないように思われた。

静岡は、いいぞ。

(27生 上田 朋子)

「僕の遅刻半生」

僕が初めて遅刻したのは、保育園の時であった。この頃は家でNHK教育の番組を鑑賞後、祖母の焦燥をよそに優雅に彼女の車に乗り込み、そして真つ暗な体育館倉庫に閉じ込められていたものである。以下、僕の半生と遅刻との関わりについて述べる。

小学校低学年の時には兄が分団長をしていたため比較的遅刻することは少なかったが、彼の卒業と同時に僕が集合時間に間に合わない

いことが増えていった。(同じ地区に住む子どもたちで構成され、固まって登校する集団を「分団」と呼び、各分団は学校への距離に合う集合時間を自分たちで設定する。) 少しばかり持久走に覚えがあるのは、毎日のように重たいランドセルを背負って前を歩く分団に追いつこうと走っていたからかもしれない。高学年になると分団長や副分団長をやらなければならなかったのだが、前副分団長が僕に勝るとも劣らない遅刻癖を持っていたという前例があったため、ここでも僕の登校スタイルに改善はなかった。この時から幼なじみであった同学年の友達からの不信感が募っていき、僕の遅刻に関して議論の場が設けられることもあった。中学生になっても、僕のスタンスは変わらなかった。しかしここで「朝練」という概念に遭遇する。朝練とは、朝7時半前から部活動に励むという非常に恐ろしい行いだ。中学になると多くの人が毎日朝練に出向いていた。僕も例外でなく、毎朝今では考えられない早起きをして朝練に行ったもの。しかしそこでも時間に間に合うか間に合わないかの瀬戸際にいたのである。部活を引退すると余裕ができるものと思いかもしれないが、実際そう甘くはなく、瀬戸際が内申書に書かれる文字通りの「遅刻」に移行しただけであった。その状態は高校生になっても引き続き、年を追うごとに遅刻の割合も増えていった。毎年某部活を全国大会へ導く恐ろしい形相をした体育教師が玄関に待ち構えていたとしても、その恐怖に慣れた。大学になってからのことは、教員の方々がこの文章をご覧になっている可能性もあるので割愛させていただく。長いスパンで考えた時、遅刻はしない方が何かと都合がいい。こ

のままでは今後、常にリストラの恐怖に怯えながら生活することになる。ただ、これだけ遅刻していても、改善しようという意志を失ったことはない。これまで様々な方法を試してみたが、いずれも失敗に終わっただけである。もう、精神的な方法は通用しないだろう。僕の時間意識に関する学術的な根拠と改善法を模索する必要があるのだ。タイムリミットに対する過剰な信頼をどうすれば捨てるのか、と。

長々と語ってきたが、僕が言いたいことは「これからも遅刻と共に生活せねばならない」ということである。遅刻をしてきて早15年。僕というものを語る上で遅刻は切っても切り離せない存在なのだ。これからは「共に生きる」というスタンスで生きていきたい。遅刻男子の益々の発展を祈って、飛翔な日々とする。いや、発展したらダメだ。

(27生 佐藤 大志)